

(第一回)

2017(平成29)年度入学試験問題

国 語

《注 意》

- (1) 問題は ～ まであります。
- (2) 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- (3) 受験番号、氏名を忘れずに記入してください。
- (4) 試験時間は 50 分です。
- (5) 解答に際して、句読点・符号などが含まれる場合には 1 字分として数えます。

城 西 大 学 附 属

城 西 高 等 学 校

一

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

高次の情緒とは何か。それは^①生得的にある情緒ではなく、教育により育くまれ磨かれる情緒と言つてもよい。たとえば自らの悲しみを悲しむのは原初的であるが、他人の悲しみを悲しむ、というのは高次の情緒である。

他人の不幸に対する感受性も高次の情緒の一つである。^①伝統的に、この情緒を育てるうえでの最大の教師は貧困であつた。働いても働いても食べて行けない、幼い子供たちが餓死したり医者にもかかれず死んでいく、という貧困である。ユウシ以来四十年ほど前まで、我が国にはこの貧困が常に存在した。これが失われてからこの情緒は教えにくくなった。日本に貧困を取り戻す、というのは無論筋違ひである。幸いにして我が国には、貧困の悲しみや苛酷を描いた文学が豊富にある。これら小説、詩歌、作文などを涙とともに味わい、その情緒を胸にしっかりとしまひこむことが大切と思う。

高次の情緒には、なつかしさ、という情緒もある。人口の都市集中が進み、故郷をもたない人々が増える中で、この情緒も教えにくくなっている。幸いにして、望郷の歌は万葉の頃から啄木や茂吉に至るまで、素晴らしいものが数多くある。朔太郎や犀星などの詩まで含めると、この情緒は日本のお家芸とも言える。^②国語の時間にこれらを暗誦し、美しいリズムとともに胸にしまひこむことが望ましい。

日本の誇る「もののあはれ」もある。我が国の古典にはこればかりと言つてよいほど溢れている。中世文学を研究している英国の友人によると、やはり「もののあはれ」が英国人には難しいと言う。英国にもこの情緒はもちろんあるが、日本人ほど鋭くないので言語化されていらないらしい。古典を読ませ、日本人として必須のこの情緒を育くむことは、教育の一大目標と言つてよいほどのものである。美しいものを愛でそれに感動することも大切である。この情緒は一般に考えられているよりはるかに重要なものと思う。数学者にとつてなら、これは最重要と言つてよい。美感や調和感なくしては、いくら論理的思考力が拔群であつても、どちらの方向に論理を進めてよいのかわからない。何を研究すべきかがわからないし、どの道筋を辿るべきかもわからない。数学研究とは、^②高い山の頂にある美しい花を取りに行くようなものだから、その美しさに感動しなければ、そもそも研究する気にさえない。美的感受性の重要性は、私の接した自然科学者のほとんどが、その分野でも同様に大切と言つたから、自然科学全般にあてはまるのだろう。

美しいものへの感動を得るには、自然や芸術に親しむことも大事だが、それだけでは不十分である。美しい詩歌、漢詩、自然を謳歌した文学などに触れることで、さらに美への感受性が深まる。「小諸なる古城のほとり雲白く遊子悲しむ……」とか^③「国破れて山河あり城春にして草木深し……」といった詩の、美しいインリツに酔いしれることが大切である。ここでも朗唱暗誦がよい。^④美への感受

性を深めるに止まらず、品格を高めるといふ思いがけない。フクサンフツもあろう。

勇氣、誠実、正義感、慈愛、忍耐、礼節、※そくいん惻隱、名譽と恥、ひきよう卑怯を憎む心など武士道精神に由来するかたちや情緒も、感動の物語とともに吸収するのがよい。終戦後六十年近くたち、親や教師はもはやこれらを説教により教えることができなくなっているからである。これらは道徳であり、日本人としての行動基準でもあるから、幼年期に徹底しないといけない。いじめなどは、卑怯を教えない限り、止むはずもない。

家族愛、郷土愛、祖国愛、人類愛も、ぜひ育ておかねばならない。これらは人間としての基本であるばかりか、国際人になるためにも不可欠である。どれか一つでも欠けていては、国際社会で一人前と見なされない。地球市民などという人間は世界で通用しない。

私は小学校四年生か五年生の頃、デ・アミーチス作の『クオレ』を読んだ。イタリアの小学校の日常を通して、勇氣、友情、惻隱、卑怯、家族愛、祖国愛などを描いた名作である。中に「母を尋ねて三千里」「難破船」など、感動の物語がいくつ挿入されている。私はこれを涙を流しながら何度も読み返し、大きく感化された。ワンリョクのあるガルローネ少年が、貧しい行商人の息子がいじめられるのを力ずくで守る、などという所にいたく感激した。弱い者は身を挺してでも守る、という態度はすぐ実行に移したほどである。

「フィレンツェの少年筆耕」や「母を尋ねて三千里」では親子の情愛を、「難破船」では自己犠牲の美しさを、「パドバの少年愛国者」では祖国愛を学んだ。この読書で感動とともに胸に吸いこんだものは、五十年近くたった今日に至るも消えず、私の情緒の一部となっている。^⑤少年の頃に読んだ本が半世紀を経てなお息づいているのである。

余談だが、三十代の頃、ある雑誌に「幼少時に読んでもっとも影響された本を再読し感想を書け」という原稿を依頼された。『クオレ』を取り出し読み直してみた。さほど感動しなかった。私はこの時、「小学生の時に読んでおいてよかった」とつくづく思った。

しばらく前のことだが、少年少女世界文学全集といったシリーズの広告に、「早く読まないと大人になっちゃう」という文句が、eソえてありほとほと感心したことがある。^⑥読むべき本を読むべき時に読む、というのが重要で、この時を逸し大人になってからではもう遅い。情緒を養ううえで、小学生の頃までの読書がいかに大切かということである。

（藤原正彦『祖国とは国語』）

※惻隱——かわいそうに思つて同情すること。

問一 〜〜部 a↘e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ――部 ①「生得的」、②「お家芸」の本文中の意味として最もふさわしいものを次のア↘エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

①「生得的」 ア 本来備わっている先天的なもの イ 生まれたときに親から教わるもの

ウ 生活する中で身につくもの エ 無意識のうちに知っているもの

②「お家芸」 ア 伝統に基づいたしきたり イ 昔から続く古典的な習慣

ウ 最も得意とする分野 エ 洗練された人のたしなみ

問三 ――部 ①「伝統的に、この情緒を育てるうえでの最大の教師は貧困であった」とあるが、それはどういうことか。本文の言葉を用いて六十字以上七十字以内で説明しなさい。

問四 ――部 ②「高い山の頂にある美しい花」とあるが、それは具体的に何のことをたとえているのか。本文の内容を踏まえ、自分の言葉で説明しなさい。

問五 ――部 ③「国破れて山河あり城春にして草木深し……」とあるが、この漢詩の作者は次のア↘エのうちだれか。記号で答えなさい。

ア 杜甫 イ 孔子 ウ 司馬遷 エ 王維

問六 ――部 ④「美への感受性」とあるが、これは何か。本文中から十七字で抜き出して答えなさい。

問七 ――部 ⑤「少年の頃に読んだ本が半世紀を経てなお息づいているのである」とあるが、これはどういうことか。次のア↘エの中から最もふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 少年時代から読み続けてきた本こそが、今の自分にとって宝物であるということ。

イ 少年時代に強く感化された本は、大人になってから読んでも感動するということ。

ウ 少年時代に本を読んで感動した経験が、今の自分を作っているということ。

エ 少年時代に本を読むことが大切だということを、改めて気づいたということ。

問八 本文全体の筆者の主張として最もふさわしいものを次のア↘エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 今日の日においていじめがなくならないのは、学校の道德の授業で卑怯を教えない教師のせいである。

イ 学校で古典を勉強しなければならない理由は、言語化できない「もののあはれ」を身につけるためだ。

ウ 国際人として生きていくには、誰よりも日本について詳しく知らなければならないため、困難だ。

エ デ・アミーンチス作の『クオレ』などの感動の物語は、幼少期に読んでおくべき作品である。

問九 ―― 部⑥「読むべき本を読むべき時に読む、く大切にということである」とあるが、あなたがこれまでに読んできた本を一つ挙げ、その読書経験により、どのような「高次の情緒」が養われたか、四十字以上で説明しなさい。解答は解答欄の指示に従うこと。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

父ちゃんの船が見つかったという連絡があったのは、父ちゃんがなくなって三日目のことだった。やっぱり父ちゃんは帰ってきた！ と、おれは喜んだ。けれど港にあったのは、父ちゃんのサバ^{*}ニの残骸だった。

おれはこのときはじめて、もしかしたら父ちゃんはもう生きていないかもしれないと思った。それは頭のほんの片隅で思ったことで、多くの部分では、きっと大丈夫、いつか帰ってくる、と固く信じていた。けれどどういうわけか、その「A」[□]という思いは、その後どんどんどんどん大きくなって、「B」[□]を少しずつ侵食していった。

身体を中心に、ぼつかりと穴が空いたような「C」[□]があった。この「C」[□]をどうしたら埋めることができるのか、どうしたら慣れていけるのか、まるでわからなかった。

由真は日中、率先して友達と遊び、夕方になって帰ってくる、父ちゃんがいらないと言って泣いた。悲しい現実に一時的にふたをして遊び、安心できる我が家で泣くという、由真らしいやり方だった。由真なりに、父ちゃんのいない現実を受け入れているのだと感じた。

母ちゃんはじつと耐えているように見えた。なにかあれば連絡がくるからと言って、いつも通りに照屋さんの海ぶどうの養殖場に手伝いに行った。

D

由真はそう言って泣いたけれど、母ちゃんは毅然としていた。

「父ちゃん帰ってくる。今はあんたたちにご飯を食べさせることが第一さ」

母ちゃんが言うのと、由真は、ご飯なんていらない！ と怒ったけれど、それでも腹は減るし、夜になつたら眠くなるのだ。

おれは、孝俊と保生が誘ってくれて何度か一緒に遊んだけれど、^①てんでだめだった。遊びに夢中になってしまった、その一瞬後に父ちゃんのことを思い出しては、すさまじい自己嫌悪に陥った。父ちゃんの不在そのものよりも、父ちゃんのことを少しの間でも忘れて過ごしていたという罪悪感に、自分自身が耐えられないのだった。

島中が父ちゃんが戻らないことにピリピリしていて、そして、みんなおれたちにやさしかった。四日が過ぎて、五日が過ぎた。父ちゃんについての情報はなにもなかった。父ちゃんの生存は絶望的だろうと、誰もが思いはじめていた。

おれは泣けなかった。父ちゃんが帰ってくるかもしれないのに、泣いてしまうのは違う気がした。そのくせ、頭のどこかでは、父ちゃんのない生活に慣れなければいけないのだと、すでに父ちゃんの帰宅をあきらめている自分もいるのだった。

六日目。おれは家で一人、タオの家から借りた本を読み終えた。字を追っていたら、いつの間にか終わっていたのだった。感想という感想はなかったけれど、難解だったためか、ささやかな達成感だけが残った。

②ふいに視線を上げると、すだれ越しに夏の午前中の明るい日差しが見えた。反対に、自分がいる部屋のなかは、ほの暗い。ほんの数メートル歩けば、あの日差しの中に入るのに、なぜか今おれがいる場所から、すだれの向こうはとても遠くて、別世界のような気がした。

父ちゃんは今、どこにいろのだろう。どこかの島に漂着して、洞窟のなかから外の日射しを見つめている父ちゃんの姿が、ふと頭に浮かんだ。それは今の自分と同じ状況だった。父ちゃんは船を見つけて急いで洞窟から出て、大きく手を振るのだ。船が気付いて、父ちゃんを無事に救出する。

そこまで想像して、おれは勢いよく立ち上がってすだれをめくった。刺すような夏の光が飛び込んできて、思わず目を伏せる。そうだ、タオの家に行こう。手元の本を返して、新たに別の本を借りよう。たとえタオがいなくても、アンナがいるだろう。

台所で顔を洗って、外に出た。なんだか自分が自分でないような、心と身体が一致しないような感覚だった。それを振り払いたくて、^③おれはタオの家まで力いっぱい走っていった。

「本貸して」

出てきたタオに、息を切らしたまま玄関先で言うと、タオは無表情で、どうぞ、となかに入るように促した。おじさんもアンナもないようだった。

汗だくのおれに、タオがさんぴん茶を出してくれたので、一気に二杯飲んだ。

「好きな本を持っていいよ」

タオはそう言ったきり、なにやら難しそうな本を読んでいた。おれは、なるべく字が大きくて薄い本をさがした。国語の授業で、名前を聞いたことのある作家の本が何冊かあったので、とりあえずそれを借りることにした。字は小さかったけれど、それほど厚くなかった。

「ありがとう。じゃあな」

「あ、ちょっと待って」

帰ろうとしたところ、タオに呼び止められた。

「おじさんのこと」

「うん、ああ。大丈夫。どうもありがとう」

タオに、父ちゃんのことでなくさめられるのはびんとかなかったし、できればその話題には触れてほしくなかった。タオだけは、いつも通りに^④どこか超然としていてはしかった。

「待ってよ、^{ゆきと}征人。話があるんだ」

タオに再度、呼び止められた。

「なに」

「ドゥヤーギーのことだ」

ふつ、と鼻から息が漏れた。こんなときにドゥヤーギーの話をするのが、タオなのだ。

「征人。ドゥヤーギーの力って知ってるか？」

「力？ なんのことか？」

「死者を生き返らせる力だ」

一瞬の間のあと、おれは大きな声を出していた。

「父ちゃんのことかっ！ タオは、おれの父ちゃんが死んだと思ってるんか！」

タオはおれの目をじっと見つめ返した。

「もう丸五日経った。海で遭難したときの生存率は……」

「言っなっ！」

そんなことわかってる。ちゃんとわかってる。ぜんぶわかってるんだ。おれだって、父ちゃんはもう生きていないかもしれないと、どこかで思ってる。でもそれを、自分以外の誰かに言われるのは嫌なのだ。

「これを見てくれ」

タオが差し出したのは、古ぼけて茶色っぽくなった紙の束だった。

「お父さんの資料から見つけたんだ。ドゥヤーギーのことが書いてある」

タオんちのおじさんは民俗学者だ。この島の神事や民話について調べているらしい。

「だから、なにつて！」

紙の束から目をそむけて、おれは言った。

「ドゥヤーギーの体毛を手に入れることができれば、死者が生き返るんだ」

⑤ おれは目をむいて、タオを見た。そしてそのまま、タオの家をあとにした。

（椰月美智子『14歳の水平線』）

※サバニ——琉球地方で使われていた漁船の名称。

※ドゥヤーギー——この島に伝わる妖怪。

問一 空欄A・Bに入る言葉を本文中から、それぞれ六字で抜き出して答えなさい。

問二 空欄Cに入る言葉を次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 緊張感 イ 喪失感 ウ 疲労感 エ 罪悪感

問三 空欄Dに入る言葉を次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「母ちゃん、元気出して。父ちゃんはきっと帰ってくるよ」

イ「母ちゃんは、父ちゃんのことが心配じゃないの？」

ウ「母ちゃん、おなかが減ったよ。何か食べるものはないの？」

エ「母ちゃん、こんなときにも働いてくれてありがとう」

問四 ―― 部①「てんでだめだった」とあるが、どういうことか。「くにもかかわらず」という言葉を使って説明しなさい。

問五 ―― 部②「ふいに視線を上げると、すだれ越しに夏の午前中の明るい陽射しが見えた。反対に、自分がある部屋のなかは、ほの暗い」の表現について説明したものとしてもっともふさわしいものを次のア―エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア「夏の午前中の明るい日差し」はタオの家から借りた本を読み終えた達成感を象徴しており、「自分がある部屋のなかは、ほの暗い」は父ちゃんの生存を絶望している征人の気持ちを象徴している。

イタオの家から借りた本を読み終えた達成感に浸っていたものの、ふいに視線を上げると父ちゃんがいない現実を引き戻された征人の様子が日差しの明るさや、部屋の薄暗さで表現されている。

ウ「明るい日差し」は征人と父ちゃんが離れていても同じ日差しを見つめているという親子の絆を象徴しており、「自分がある部屋のなかは、ほの暗い」は征人と父ちゃんが離れ離れになっっている現実を象徴している。

エ父ちゃんが帰ってこない自分の境遇と、それとは無関係に思われる周囲の様子が明るさの表現によって対照的に表現されている。

問六 ―― 部③「おれはタオの家まで力いっぱい走っていった」とあるが、それはなぜか。三十字以内で説明しなさい。

問七 ―― 部④「どこか超然としていてほしかった」とあるが、征人が期待したタオの超然とした様子とは、具体的に「どんな時」に「どんな様子」でいることか。本文に即して説明しなさい。

問八 ―― 部⑤「おれは目をむいて、タオを見た。そしてそのまま、タオの家をあとした」とあるが、このときの「おれ」（征人）の説明としてもっともふさわしいものを次のア―エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

アタオの突然の提案に驚いたものの、父ちゃんのことを真剣に考えていることに感謝している。

イ父ちゃんのこととタオからなぐさめられるのかと思身構えていたが、ドゥヤーギーの話だったことに拍子抜けし、驚きを隠せずにいる。

ウ まだ生きているかもしれない父ちゃんのことを「死者」扱いされたことに怒り、耐えきれずにいる。

エ 自分は父ちゃんのことと真剣に悩んでいるのに、非科学的で意味がよくわからないことを言いだしたタオに対して怒っている。

問九 本文について説明したものとしてもっともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 父ちゃんはいつか帰ってくるという思いと、死んでしまっているかもしれないという思いの間で揺れる征人の気持ちだが、征人の言動やタオとのやり取りの中で克明に表現されている。

イ 父ちゃんが行方不明になってから人々の気持ち日々変わっていく様子を、征人を中心として一人ひとり丁寧に描いている。

ウ 父ちゃんが行方不明になったことを受け止めきれない征人の様子と、そんなときでもいつも通りに超然としているタオの様子が対照的に表現されている。

エ 父ちゃんが行方不明になってしまったことを受け止めきれない征人とその家族の様子が、周囲の無関心で冷たい様子を表現することで際立っている。

三

次の問いに答えなさい。

問一 次の文について、――部①、③の品詞名を答えなさい。~~~~部②、④は活用の種類を答えなさい。

① その声に気がついてみると、杜子春は ② やはり夕日を ③ 浴びて、 ④ 洛陽の西の門の下に、ぼんやり ⑤ たたずんでいるのでした。

問二 次の熟語の（ ）内の数字を合計するといくつになるか漢数字で答えなさい。

- (1) 一石（ ）鳥 + （ ）部始終
- (2) （ ）期一会 + （ ）網打尽
- (3) （ ）目瞭然 + 一日（ ）秋
- (4) （ ）転八倒 + 傍目（ ）目
- (5) （ ）家言 + （ ）面楚歌

